

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

東京科学大学

前期日程 理工学系

科目

数学

総括

試験時間	180分	難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
満点(配点)	300点	分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

〈総論〉

一昨年、昨年と東京科学大【理工学系】としてはやや穏やかな出題が続いたが、今年は大幅に難化した。大問5つに対して設問数が11個で昨年(15個)より減少し、昨年はなかった誘導設問のない問題〔5〕も出題された。

〔3〕は完答を狙えるが、他の大問を完答するのは容易ではない。特に〔4〕は難しく、計算量も多い。まずは部分点も含めて5割を目指したい。

〈特記事項・トピックス〉

昨年出題がなかった複素数平面の問題が出題され、昨年出題された空間図形の問題が出題されなかった。また、確率の出題はなかったが、場合の数の知識が必要となる問題が出題された。特筆すべきは、数学Ⅲの知識が必要な問題が〔5〕の1問だけであったことである。昨年は、数学Ⅲの知識が必要な問題が4題出題された。

〈合格への学習対策〉

「数学Ⅲの極限、微分、積分」と「確率」、「複素数平面」が出題されることが多い。まずはこれらの分野に苦手意識をもたないように学習を進める必要があるだろう。また、傾向に偏りはあるものの、今年や2022年、2021年のように傾向から外れることもあるので、全分野を満遍なく学習した後に、頻出分野を中心とした演習を重ねるのがよいだろう。

設問ごとの分析

問題番号	出題形式	範囲	分野・テーマ(表題)	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
〔1〕	記述	数学Ⅰ	数と式	なんとなくで答えを合わせることは難しくないが、背理法で示すべきことが多数ある。実感ほど得点は高くないだろう。解答速報を参考にして研究しておきたい。	やや難
〔2〕	記述	数学A 数学B	場合の数 数列	(1)では、二項係数の性質を証明する。(2)(3)では、不等式や方程式をみたく空間の格子点の個数を求める。(2)で(1)が利用できるが、利用しなくても解ける。	標準
〔3〕	記述	数学Ⅱ	図形と方程式	方針は容易に立つので、やや煩雑な計算をこなしていくだけである。ここは完答したい。	やや易
〔4〕	記述	数学C 数学B	複素数平面 数列	複素数平面と数列の融合問題である。方針も立てにくいですが、計算もかなり煩雑なので、うまく計算することが大事である。 $e(\theta)$ は無理に使うとしない方が解きやすい。	難
〔5〕	記述	数学Ⅲ	極限・積分法	どこから手を付けるかがわかりにくいですが、まずは $n \rightarrow \infty$ の極限をとることから考える。その際には、半角の公式、部分積分、はさみうちの原理を利用する。この後は、 k の小さい方から考えて、不等式が初めて成り立つような k をみつけることになる。先に部分積分法により漸化式を立てると計算しやすい。	やや難

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階〔難・やや難・標準・やや易・易〕で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。